

大熊段1号墳

第1次発掘調査の概要

2020

鳥取大学 地域学部 考古学研究室

目次

I 調査に至る経緯と目的	1
II 古墳周辺の地理的・歴史的環境	2
III 古墳の現状と調査区の設定	5
IV 前方部トレンチ調査の概要	6
V 出土遺物	7
VI まとめと今後の課題	10

例言

- 1.本書は、鳥取大学湖山キャンパスに隣接する大熊段古墳群のうち、前方後円墳である1号墳の発掘調査について、その概要を報告するものである。調査は、2019年8月26日～9月12日にかけて、鳥取大学地域学部国際地域文化コースにおける実習科目「国際地域文化調査実習I・II」及び「地域調査プロジェクト」の一部として行なった。参加学生は、陳永強、磯遊康孝、野坂明日美、徳久七映、鹿毛瞭馨、大久保藍（3年生）、上野裕貴、加納匠、後藤璃乃、九十九梨沙、下野夏海、田部芽以、野田未織（2年生）である。
- 2.本書の作成は、陳永強、磯遊康孝、野坂明日美、鹿毛瞭馨、大久保藍による遺物等の整理作業を踏まえ、高田健一、中原計が分担執筆した。
- 3.調査にあたっては、以下の方々、機関のご協力、ご支援をいただいた。篤く感謝申し上げます。
尾崎繁、影井尚夫、田子寿文、田中穰、平勢隆郎、株式会社アイテック、鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会

I 調査に至る経緯と目的

既往の調査と研究史 大熊段1号墳は、鳥取市湖山町の濃山丘陵上に立地する前方後円墳である(図1)。古くからその存在が知られており、江戸時代前期の寛文年間(1661-1673)に作成された『御留場絵図』には「大隈」と記された腰高な墳丘が描かれている。また、『因伯二国に於ける古墳の調査』には全長48m、後円部径34.5m、高さ7.5m、前方部幅14.4mの規模をもつ北向きの前方後円墳として紹介された(梅原1924)。

1966年に鳥取大学が湖山町に統合移転してきた際、キャンパス造成工事によって多くの古墳が未調査のまま破壊されたと考えられるが(平勢他1986)、前方後円墳の1号墳とその北側にある円墳の2号墳は大学所有地外に位置したために削平を免れた。1974年には、「大熊段(大隈段)1・2号墳」として鳥取市指定史跡に指定されて保護が図られている。ところが、1970年代末～80年代にかけて、隣接地で校舎の拡張が計画されるたびに古墳周辺の発掘調査(試掘調査を含む)が行なわれてきた。教育学部棟増築に伴う調査の結果、円墳の2号墳に周溝が伴い、円筒埴輪が存在することが明らかになった(豊島他1988)。また、教養部棟増築に伴う調査によって、1号墳にも円筒埴輪が存在すると考えられたが、調査区が削平地に設けられたために小片が多い。また、墳丘の南西側には中世墓3基が見つかった他、弥生土器片が出土したり、太平洋戦争中に松根油を採取した穴が検出されるなどして、濃山丘陵上の人間活動の痕跡が多様な時代に渡ることも明らかにされてきた(豊島他1988, 平勢1985, 田中1986)。

しかし、1号墳そのものはこれまでに発掘調査が行なわれたことがなく、詳しい時期は不明である。かつて出土した遺物に鉄鏃と鉋があるというが、現物は行方不明であり、実態はわからない。これまでに古墳時代中期末に位置付ける意見もある一方(鳥取県埋蔵文化財センター1986)、近年では、円筒埴輪片を元に後期に降ると考える意見が主流と言えるが(中原1991, 東方2008)、古墳の年代的な位置付けについて詳細な議論を展開するには資料が不足している。

調査の経緯と目的 古墳の築造時期だけでなく、墳丘形態や規模についても解明すべき課題は多い。例えば、上述の梅原報告によると、後円部径に比べて前方部幅の狭い点が「特殊の外容を示す」とされた。しかし、現状では前方部幅は24mあり、特に狭いとは思われない。むしろ、くびれ部幅が狭く低平である点が後期古墳としてはややイレギュラーな姿と言えよう。大正年間に観察された姿から大きく変化しているとするれば、本来の墳丘形態はどのようなものか、という点が明らかにすべき基礎的な課題である。

前方部形態が変容した原因の一つは、その西側に掘られた大きな溝と考えられる。この溝は1988年の測量調査の時点で「戦時中造成溝」と注記され、後円部平坦面の「砲台設置跡」とされた三つの溝とともに太平洋戦争中に掘削されたものとの認識が示された(豊島他1988)。溝の性格や掘削時期についての情報は、近隣の方からの聞き取りによるものであるらしい¹⁾。つまり、古墳に掘削された溝は、20世紀の戦争遺跡の一部であると考えられる。これらの溝に関して、終戦前後のことを記憶する周辺の住民や、湖山周辺で戦時労務作業に動員された方々にもインタビューを試みたが、残念ながら、詳しい情報には行きあたらなかった。

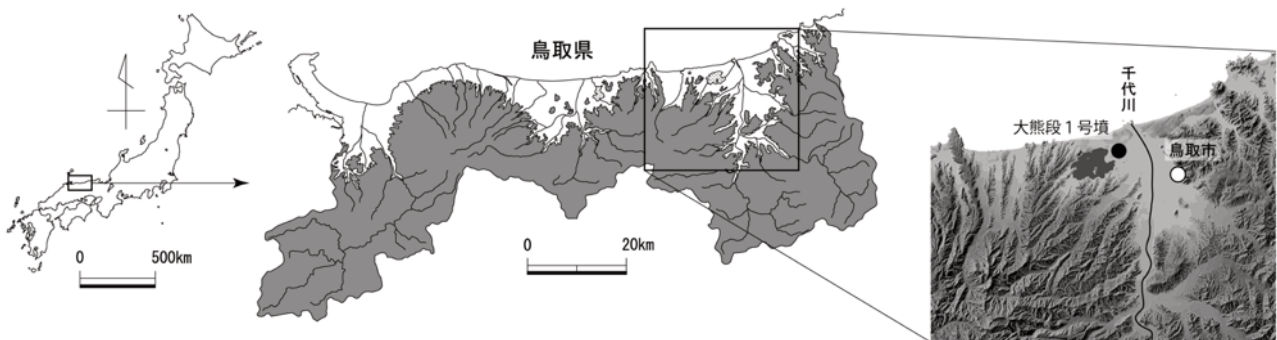


図1 大熊段1号墳の位置

文献に直接関連する記載はないが、この地に「砲台」が設置される背景を考えると、昭和17年に湖山に軍用機の工場ができ、滑走路が整備されたことが挙げられよう(大嶋2015)。敗戦間際には、その工場が米軍の爆撃目標になっていたことを窺わせる資料があり、同時期には「チ号演習」と称された米軍上陸を睨んだ海岸部の陣地構築作戦が県内各地で展開していた(西村2017)。墳丘上の溝は、「チ号演習」との関連を考へるが、その点を詳しく検討しようとするれば、考古学的にアプローチするしかない状況である。

このように、大熊段1号墳には古墳時代の有力墳として明らかにすべき調査課題のほか、濃山丘陵上で展開した様々な時代の人間活動の痕跡が残されていると考えられ、その全容を追究することは、地域史を深く理解することにつながると考えられる。このような問題意識のもと、古墳やその周辺の発掘調査を行なうこととした。調査は、2019年8月26日～9月12日にかけて、鳥取大学地域学部国際地域文化コースにおける実習科目「国際地域文化調査実習I・II」及び「地域調査プロジェクト」の一部として実施した。(高田)

II 古墳周辺の地理的・歴史的環境

地形と地質 大熊段1号墳が立地する濃山丘陵は、湖山池と湖山砂丘の中間に位置する、標高10～30mほどの低平な丘陵である。その地下地質は、白兎海岸、浜坂砂丘などで確認されているものと共通するが、約10万年前に形成された湯山砂層(古砂丘)の基盤上に赤褐色古土壌、大山倉吉パミス(DKP)、褐色中部ローム、始良丹沢(AT)火山灰が認められている。これらの更新世の堆積の上に完新世に形成されたクロボク土壌が発達しているが、開墾や削平によって未攪乱の状態で残っているところは少ないと思われる。濃山丘陵の北、概ね現在のJR線より北側は海岸砂丘地帯で、新砂丘の砂層が厚く堆積している。縄文海進期には、海岸線はずっと南の桂見付近にあったと考えられるから、濃山丘陵は周辺の丘陵とともに島嶼の一部を成していたと考えられる。周辺の海域が埋積されて陸化し島嶼でなくなる時期は、おそらく弥生時代以降である。

縄文時代・弥生時代 濃山丘陵周辺で現状確認できる最古の人間活動は、縄文時代中期頃に遡る。湖山第2遺跡(図2-13)は丘陵の南裾部に位置し、附属学校建設工事に伴う発掘調査によって縄文期と考えられる海岸線が検出されるとともに、中期段階の土器片がわずかに出土している。一方、湖山池南岸の青島遺跡(図2-1)や高住平田遺跡・高住井手添遺跡(図2-3B, C)でまとまった量の中期前半の遺物が存在し、人間活動の中心は湖山池南岸にあったと考えられる。

湖山池周辺では縄文時代の遺跡として桂見遺跡(図2-5)、布勢遺跡(図2-7)がよく知られている。その主要な時期は後期前葉～中葉にあり、潟湖を利用した漁労活動を中心としつつも、様々な生業活動を表す豊富な遺物が出土している。しかし、縄文時代後期中葉～後葉にかけて、潟湖の埋積が進み、縄文時代晩期には低湿地帯に変わっていく。このような土地環境の変化を受けて、弥生時代以降は、水稻農耕に有利な谷底平野の遺跡(大柄遺跡:図2-8、本高弓ノ木遺跡:図2-9、松原田中遺跡:図2-19)や、沖積平野の遺跡(岩吉遺跡:図2-15)に活動の中心が移っていくようだ(高田2015、濱田2019)。湖山第2遺跡では、弥生時代前期末以降、中期中葉～後葉の土器が出土しているが、その量は少なく顕著な遺構もないため、土地利用の実態は不明と言わざるを得ない。ただし、キャンパス造成工事の際に出土した土器類を当時の職員が収集・保管していたものが存在する(未報告)。大熊段古墳群の南側と考えられる地点から出土したものの中に前期～後期まで様々な段階の土器片が存在するから、比較的長期にわたって土地利用がなされたと考えられる。

弥生時代後期になると、有力な墳丘墓が湖山池の南岸地域に集中する。西桂見墳丘墓(図2-a)をはじめ、布勢鶴指奥墳丘墓(図2-e)、里仁1号墓(図2-h)、松原10号墓(図2-r)などは、弥生時代における湖山池南岸地域が山陰地方の中心地の一つであり、様々な富や情報の集積地であった可能性を示唆している。湖山第2遺跡でも、中期以前とは異なって、後期中葉以降の堅穴住居、掘立柱建物が営まれ、人間活動の濃密な集落域に変わっていったと考えられる。

古墳時代 古墳時代に入ると、桂見地域で有力な方墳(2号墳:図2-d)が築造されるが、これに後続する有力墳は明確でない。前方後円墳への展開は本高地域(14号墳:図2-k)や、千代川右岸の美和～久末の地域



図2 調査地周辺の遺跡

が先行すると考えられ、湖山地域での前方後円墳の築造はかなり遅れた可能性がある。未調査の古墳も多い状態ではあるが、現状では全長 60m の布勢古墳 (図 2-o) がこの地域での前方後円墳の嚆矢と考えられる存在で、後期前葉の築造と考えられている。これに後続するものとして、全長 45m の大熊段 1 号墳 (図 2-q, 図 3-1), 全長 36m の三浦 1 号墳 (図 2-p, 図 3-3) の 2 基の前方後円墳がこの順で位置付けられることが多い。いずれも周辺で発掘調査が行なわれており、円筒埴輪を有すること、須恵器が伴うことなどが知られているが、墳丘や埋葬施設の詳細は判明していない。また、これらは出土遺物の再評価が必要で、築造時期も再検討の余地がある。

濃山丘陵上では、現存する古墳以外にも多数の古墳が存在したと考えられる。鳥取大学のキャンパス造成工事に伴ってほとんどが破壊され、本来の古墳数も時期も不明な点が多い。制約が多い中、キャンパス移転前の航空写真から古墳群の復元が行なわれ (平勢他 1986), およそ 30 基近い古墳の候補が挙げられたが、確実度の高いとされたものは 9 基である (図 3)。中には築造時期の一端を知ることができる古墳もあり、『因伯二国に於ける古墳の調査』で田中永治氏所有地内の円墳とされたものは、土師器高杯の様相から中期後半のものと考えられる (梅原 1922)。また、農学部棟で見つかった箱式石棺 (図 3-c) からは、須恵器の把手付塚が出土しており、後期末以降に位置づけうる。濃山古墳群全体としては、古墳時代中期後半～後期段階



図3 大学構内の古墳分布

るから、丘陵地の開拓も進んでいた可能性がある。

中近世～近現代 中世末期には、因幡山名氏によって天神山（図2-12）に因幡守護所が設けられ、因幡の政治的な拠点となった。この地に守護所が設けられた理由の一つは、その南に位置する布勢が宗教的・商業的な拠点として人々を惹きつけていたことが考えられる（錦織 2010a, 2010b）。そして、周辺の丘陵地が住民たちの葬地として選択されたと考えられ、これまでも西桂見遺跡（図2-4）、桂見遺跡（図2-5）、布勢遺跡（図2-7）などで中世墓が調査されているが、大熊段1号墳の南側に位置する中世墓群は其中でも比較的新しく、16世紀中葉～後葉に位置付けられている（八峠 2016, 2017）。

近世には沿岸部の海岸砂丘が大きく拡大したと考えられ、濃山丘陵の北側は、「白浜」「外浜」などの地名が示す通りの広大な砂丘地となり、人間活動は大きく停滞したと考えられる。濃山丘陵の北辺から湖山池北岸を通る道は、伯耆往来として重要な東西陸路の一つであったが、しばしば飛砂で埋没したらしい。中世以前の地形、人間活動の痕跡も厚い砂層に埋もれたと考えられる。

やがて、江戸後期～明治にかけて、米子の綿商人であった船越氏（大寺屋）が数代にわたって植林活動を行なって砂丘の農地化を図り、飛砂防止に有効な垣根の開発や植樹法が確立すると、湖山池北岸から賀露方面にかけての広い範囲で開拓が始まる（田中他 1994）。明治期後半には、砂丘地における基幹産業は養蚕となり、開拓地には桑が広く栽培された。1929（昭和4）年には、山陰における製糸産業の最大手であった株式会社日本製糸の湖山工場が開設される。正確には、1908（明治41）年に鳥取市寺町に開設された工場が湖山村に移転したもののだが、ナイロンの開発やアジア侵略に伴う経済封鎖で紡績業が大きく打撃を受ける中で生産規模が縮小し、1942（昭和17）年に湖山工場は福田軽飛行機株式会社に買収される。同社は軍用グライダの製造を行っており、工場の北側に試用滑走路を整備した。やがて、1944（昭和19）年には、やはり軍用グライダの製造会社であった日産輸送機株式会社が工場（図2-21）を引き継いだ。防衛研究所が所蔵する戦史資料²⁾によると、滑走路は陸軍航空隊が所管し、1000m×100mの規模であるが砂地に舗装がないため、自重4t以下の軽飛行機に適合するものであったようだ（図2-22）。戦後もしばらくは空港として使用されたが、やがて国道9号線バイパスの敷地や住宅地となってその痕跡を留めている。（高田）

を中心としていると考えられる。

なお、濃山丘陵の東側では、湖山第1遺跡（図2-14）が調査され、古墳時代中期中葉～後葉にかけての集落遺跡が明らかになっている。

古代 この地域の古代については考古学的にはわからないことが多い。奈良県石神遺跡出土の木簡から、千代川左岸一帯は7世紀代に「高草評」が置かれていたことが窺える。横口式石槨の山ヶ鼻古墳やその近傍に塔心礎が残る菖蒲廃寺跡などを手がかりに、古海・菖蒲周辺に高草郡衙を想定する見解が多い。また、同郡は、東大寺領因幡国高庭荘として8世紀後半～11世紀前半頃まで開発された土地としても研究史上名高い（藤間 1947, 奥野 1982 など）。濃山丘陵上では、この時期の遺物は少ないながら散見され、三浦2号墳（図3-b）の削平が奈良時代と考えられるなどしてい

Ⅲ 古墳の現状と調査区の設定

1号墳は、現状で全長45m、後円部径30m、高さ5.5m、くびれ部幅16m、前方部幅24m、高さ2.5mを測る(図4)。前方部を北に向け、濃山丘陵の最高所と考えられる標高33mの地点に立地する。1924年の観察では、前方部は後円部に比して非常に幅狭く、特殊な形状と報告されたが、現状は著しく幅狭いということはない。また、全長や後円部径で100年前とは3、4mの差があるが、前方部前端部が急な崖面を呈していたり、後円部の南側裾に迫る位置に水道施設等が建設されていたりするため、墳端部が削平を受けている可能性は高い。現状では段築成は認められず、葺石も確認できない。後円部墳丘上では、細片化した円筒埴輪片が散見されるが、墳丘を圍繞するような位置関係では見つかっていない。

後円部墳頂に3箇所の溝状の掘り込みがあり、その上面の規模は、長さ約5m、幅約2.5m、深さ0.8mほどである(図5)。最も南側のものには、長さ約2m、厚さ0.5mの流紋岩塊が横たわっており、埋葬施設を構成した石材の可能性が考えられる。小規模ながら同様な溝は前方部墳頂にも存在する。また、前方部西側の溝は、上面の長さ約13m、幅約3m、深さ最大で1.8mと規模が大きい(図6)。さらに、古墳周辺には、東側の平坦面を中心に円形や溝状の窪地が存在し、墳丘上の溝と一連の遺構群となる可能性があると考えられた。

一方、古墳の西側裾の直線的な溝も「戦時中造成溝」とされたが、前方部前端に認められる方形の削平地に連続する点を勘案すると、軍事よりは単に土地の境界として掘削されたように思われる。いずれにせよ、この部分は、古墳の現状の裾部よりも1m程度低く切り下げられており、以前の試掘調査でも表土直下で地山層が検出されているから、古墳に関する情報量は期待できない。

古墳の形態や規模に関する情報収集を優先すれば、主軸上でトレンチを設定する必要があるが、古墳の東側裾部に散見される窪地が「戦時中造成溝」などに関連する遺構とすれば、調査計画の中に取り込む必要もあるため、窪地の性格をも把握できる場所でトレンチを設定した。前方部東側コーナー付近に径4m程度の円形の窪地が存在し、いわゆる「蛸壺」と呼ばれた塹壕の可能性も考慮できたため、前方部墳端の確認と合わせて窪地を取り込む形で、南北4m、東西5mのトレンチを設定した(図4)。窪地の中心を通る東西方向に土層観察用のアゼを設け、北区と南区に分割して調査を行なった。(高田)

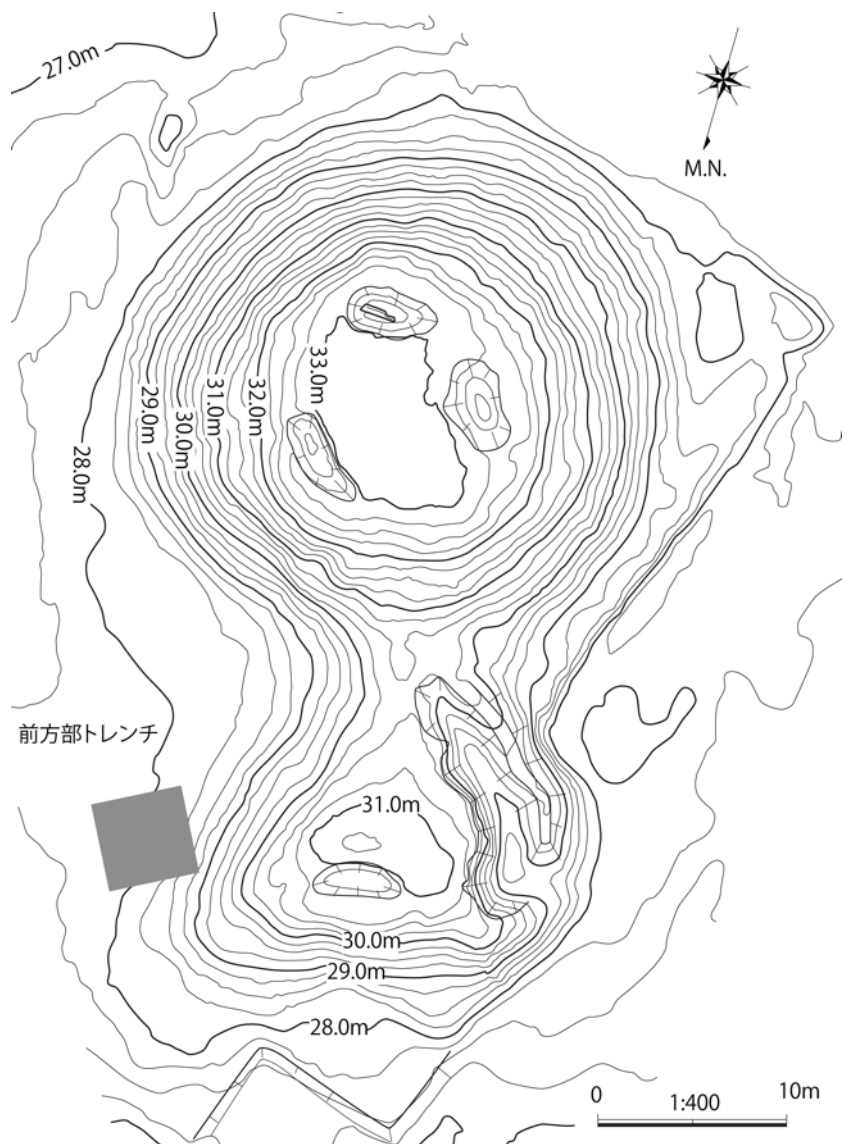


図4 大熊段1号墳実測図



図5 後円部の「砲台設置跡」



図6 前方部の「戦時中造成溝」

IV 前方部トレンチ調査の概要

前方部トレンチ（図7）の基本層序は、上から表土、造成土、流土、地山である。表土を除去したところ、トレンチ北西角から半径およそ 2m の範囲では流土が検出されたが、それ以外の場所からは人為的な攪乱に伴う造成土を検出した。攪乱は、流土およびその下の地山にまで及んでおり、造成土中には、地山起源と考えられる黄褐色土がブロック状に所々に含まれていた（図8）。造成土からは、古墳時代の埴輪、須恵器、土師器、古代の土師質土器などの遺物が出土した。攪乱が行なわれた時期は、直上の層が表土であることから、近現代ではないかと考えられるが、古代よりも新しい時期の遺物が出土していないため、現状では不明である。

また、一人用の塹壕である「蛤壺」の可能性が考えられた円形の窪地についてであるが、「蛤壺」であるとすると、『国民築城必携』（藤田 2015 に転載）によると直径 1m、深さ 1.7mの円筒状の堅穴が確認されることになる。しかし、アゼの土層を観察したが、その規模に掘り込まれた痕跡は確認できず、また、窪みに堆



図7 前方部トレンチ（東から）

積しているのは表土のみであることから、「蛸壺」である可能性は低いといわざるをえない。

地山面の傾斜は、大熊段1号墳の墳丘の傾斜とほぼ一致することから、この地山面が墳丘の一部であり、墳丘の基底部は地山を成形して作られているといえる。攪乱により墳丘面に凹凸はあるが、墳丘は概ね残存している。墳丘裾がどこまで広がっているかを確認するために、さらに掘り下げを行なう必要があったが、雨天が続いた影響もあり、調査期間の関係上、全体を掘り下げる時間的余裕がなかったため、東西ベルトの北側に幅30cmのサブトレンチを設定し、掘り下げを行なった。その結果、トレンチ西端から3.2m、地表面からの深さ70cmの地点で傾斜変換点を検出した。この地点が墳丘裾であるとする、墳丘測量図の等高線をもとにした傾斜変換点から復元されていた墳丘規模よりも1mほど外側に広がることになる。ただし、サブトレンチ内だけでの確認であり、来年度、全体的に掘り下げて確認する予定である。また、傾斜変換点から80cmほど東側に平坦面が続いたあと、トレンチ東端にかけて幅70cm、深さ30cm程度の落ち込みが確認できた。墳丘を区画するための溝の可能性も考えられるが、これの性格についても、今後の調査の課題としたい。

（中原）

V 出土遺物

遺物は、円筒埴輪片325点、土師器片1点、須恵器片5点、土師質土器片19点がある。このほかに鉄器、貨幣、土製品などが出土しているが、いずれも現代のものである。発掘調査以前の測量調査時、あるいは踏査などの際に採集した遺物も合わせて報告する（図9）。

円筒埴輪 墳丘上から採集したものと、発掘調査で出土したものがある。発掘調査で出土したのも、表土層あるいはその下の攪乱層から出土しており、原位置をとどめるものはない。多くは1辺数cm程度の小片であるが、口縁部～底部まで様々な部位の破片が出土している。

これまでに1号墳出土と考えられる円筒埴輪は、口縁部が屈曲せず直立し、端面をもつもののみが知られ

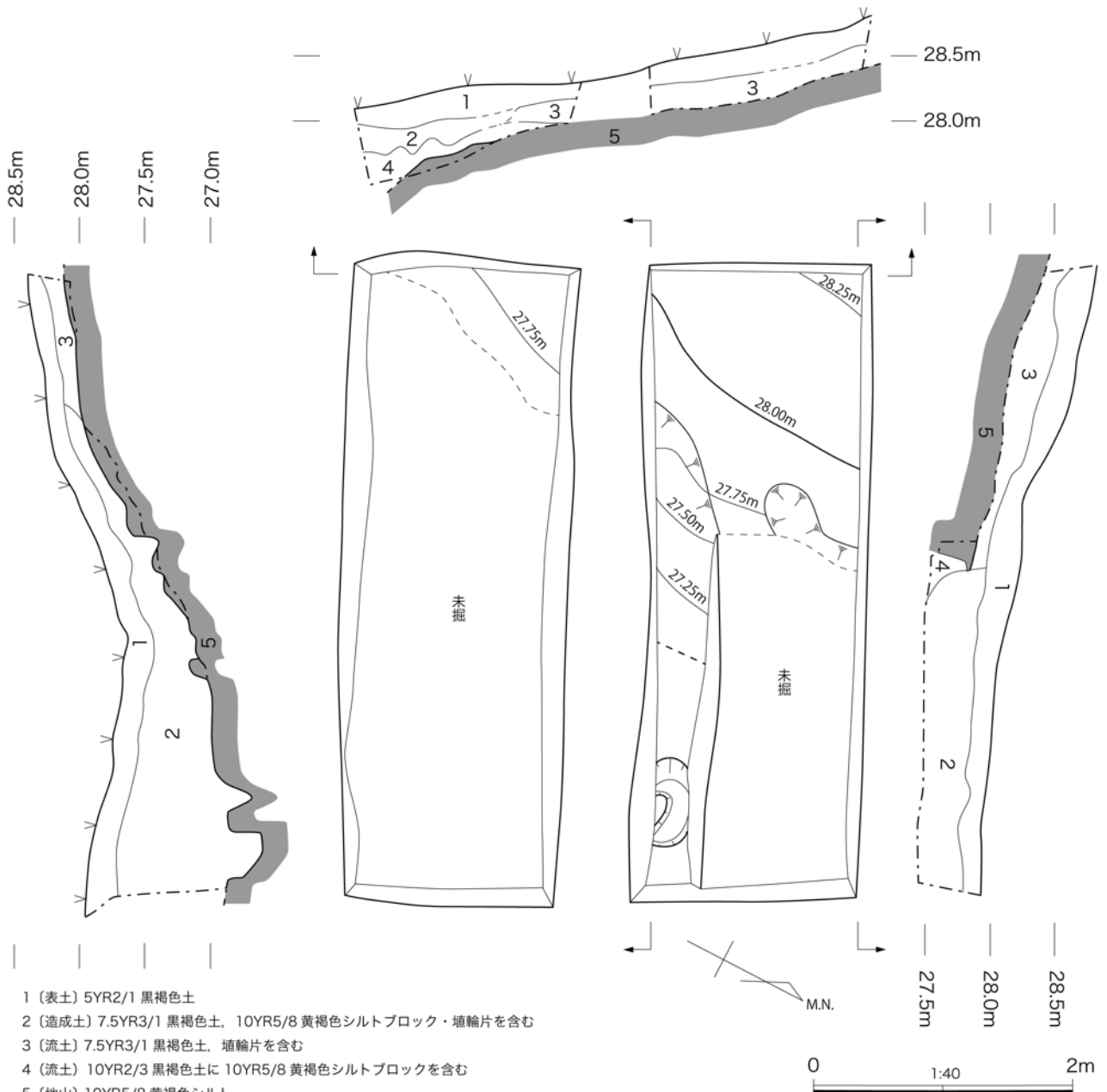


図8 サブトレンチ南壁土層図

ていたが、今回の調査では複数の異なるバリエーションがあることがわかった。また、ほぼすべての円筒埴輪片には外面に赤色顔料が塗布された痕跡があるが、底部片にはその痕跡が認められない。最下段のみ塗布されていない可能性がある。器壁の厚さや焼成の状態から、大きく2種類に分類できる。一つは厚さ1.2cm前後で相対的に薄く、焼成が堅緻な一群(1~21)である。これらは突帯の突出度が1.0~1.5cmと高く、断面が長方形ないし、各面が凹んでM字形を呈するものもある。もう一方は、厚さが1.7cm前後あり、焼成がやや軟質な一群(22~28)である。これらの突帯の形状は、突出度が0.5cm程度と低く、断面が鈍い台形ないしは三角形を呈する。前者をA群、後者をB群とすると、A群の埴輪には黒斑が認められないため、窖窯焼成の可能性がある。一方、B群には1点のみであるが外面に黒斑が認められるため、焼成法が異なる可能性がある。ただし、B群とするものの中にもハケメの細かさに幾つかのバリエーションがあり、焼成の度合いにも差がありそうだ。

1~10は、口縁部片で、いずれもA群としたものに属する。1~4は従来知られている直立気味の口縁に類

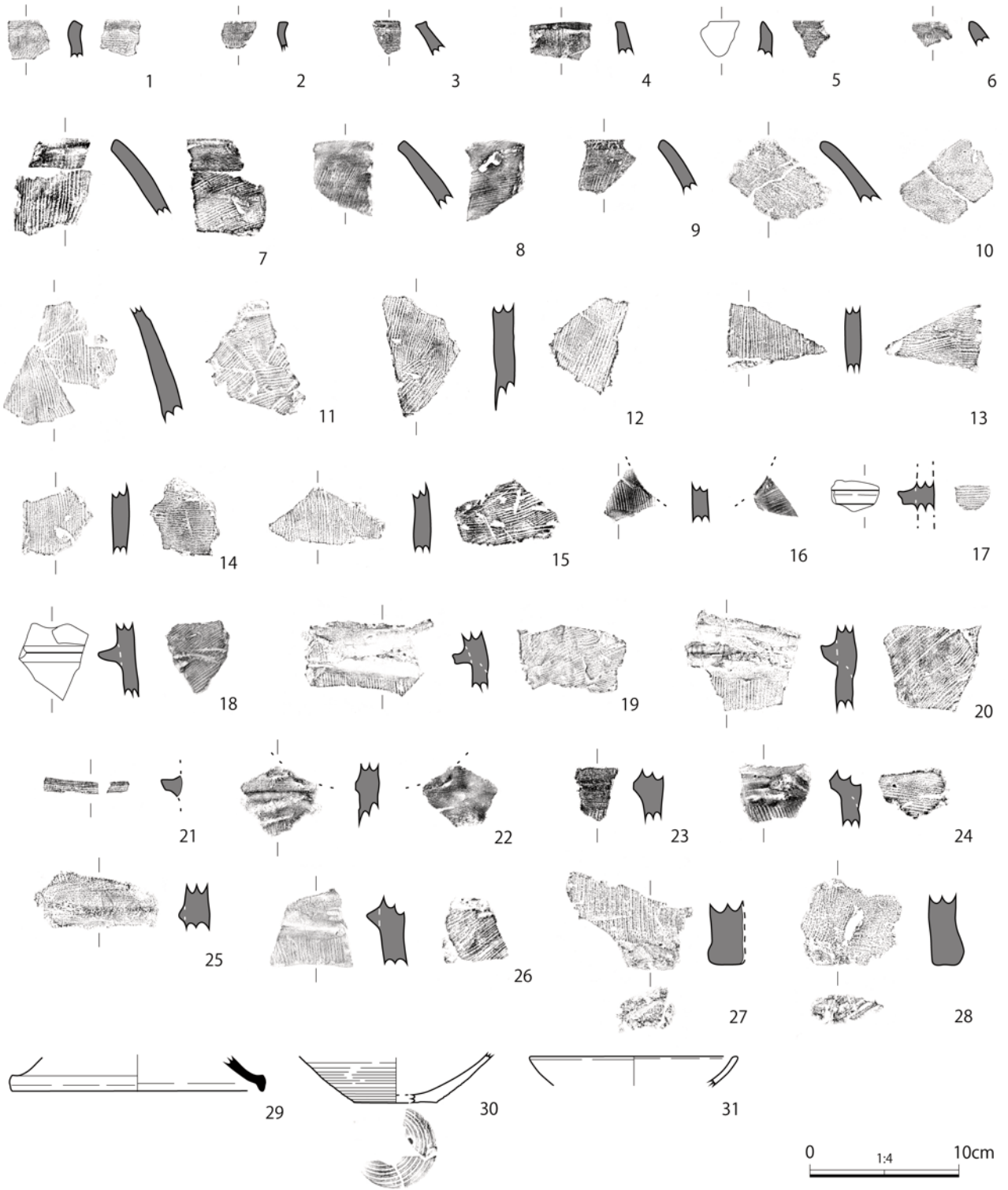


図9 出土遺物実測図

似し、口縁端部が幅 0.6~0.8cm の面をなすものである。1, 2 は口縁部がややふくらんで内湾するもので、3, 4 は口縁部が開く形状を呈して、端部をやや側方に引き出す。一方、5, 6 は口縁端部がやや尖る形態で、いずれも小片のために本来の傾きはよくわからないが、直立するものとやや開くものと2種類あるようだ。7~10 は、外側に開く形態の口縁部で、外面にやや粗いタテハケ、内面にも同様なヨコハケを施す。口縁端部に幅 0.6~0.8cm の面をもつものが多いが、丸く収めるものもある。

11～26 は円筒部片である。11 は、口縁の直下に位置すると思われる破片で、やや外反する。一方 26 は、内湾する断面形から、朝顔形埴輪の壺頸部となる可能性もある。A、B 群ともにスカシ穴の一部を残すものがあり (16, 22)、いずれも円形と知れる。段数を復元しうる手がかりはないが、2 号墳と同様な段構成とすると 4 段と考えられる。しかし、A 群は復元的にみると突帯部で径 16～17cm 程度と考えられ、非常に小型と言え。B 群とは段構成も異なる可能性がある。

27, 28 は底部片である。27 は内面が剥離しているため、調整不明であるが、28 の内面はナデ調整でハケメはみられない。底部が潰れて内外にはみ出す部分が観察できるが、それを修正する「底部調整」はみられない³⁾。また、底面にイネ科植物の茎と思われるような圧痕が認められる。

須恵器 器種が判明するものとしては、高坏の脚部片がある (29)。墳丘上で採集した。長脚高坏の脚端部と考えられる破片で、最大径 17.2cm を測る。作りはシャープでなく、陶邑編年に照らして、TK43 段階と考えられる。また、この他にカキメが施された破片があり、大きさや湾曲部の形状から横瓶ないし、提瓶の一部と考えられる。

前方部トレンチから出土したものとしては、甕ないし壺胴部片と考えられるものがある。器種や大きさはよくわからないが、器壁の厚さ 1cm 程度であり、1 辺 2cm ほどの小片ながら湾曲が認められるため、大型品ではないと思われる。内面に当て具痕残る。

これらの須恵器が古墳に伴うものとするれば、古墳の築造時期をひとまず後期後半とみることができる。

土師器 埴形を呈する高坏の坏部片が出土した。外面に赤色塗彩があり、別造りの脚部を坏部底部の内側に接合するものである。松山智弘氏 (1991) が γ 技法と呼ぶもので、この種の高坏は、鳥取市秋里遺跡などで多量に出土する傾向がある (井殿他 1996)。類例の多くは古墳時代中期中葉～後葉に位置付けられ、後期にも存続するものかどうかわからない。細片であり、これ以外に古墳時代の土師器と判断できる破片はない。同一丘陵上の南東側に位置する湖山第 1 遺跡ではこの時期の集落が存在しているから、古墳築造以前の遺物が墳丘盛土などに混入していた可能性がある。

土師質土器 歴史時代の遺物としては、坏または皿と考えられるものがある。30 は復元実測でほぼ完形に復元しうるもので、口縁端部を欠くが、径 13～14cm 程度、高さ 4cm 程度に復元できる坏である。底面に回転糸切り痕が残り、外面に多条の沈線がめぐる。類例は岩吉遺跡や山ヶ鼻遺跡などにあり、10 世紀代の KV 期に位置づけられているが (岡田・八峠 2014, 大野 2016)、やや浅い器形から判断するとさらに下る可能性もある。このほかに径 14cm の皿の口縁部片がある (31)。強い回転ナデ調整が施されており、手づくね成形ではない。法量や口縁がやや内湾する器形から判断すると、11 世紀後葉～12 世紀中葉の CII 期に位置づけられようか (岡田・八峠 2014)。この他にも、凶化できなかつたが、いずれも回転ナデ調整を施した土師器皿と思われる細片があり、外反する口縁部のものもある。

この時期の遺物は、これまでに湖山第 1 遺跡や湖山第 2 遺跡でも少量ながら散見される。海岸砂丘に立地する遺跡では、むしろこの時期の土器がまとまって出土することがある (高田 2018)。湖山砂丘においても、砂丘表面の土壌化によって人間活動が可能な時期であった可能性が考えられよう。 (高田)

VI まとめと今後の課題

まず、塹壕の可能性を考えた円形の窪みは、表土内に収まり、遺構ではなかった。遺物もなく、単に地表を浅く掘り窪めただけのものと考えられる。

一方、トレンチ西側で前方部の墳丘裾部となる地山層 (基盤のローム層) を検出したが、その直上の層まで円筒埴輪片を含むことから、大きく削平を受けていると考えられる。調査範囲内では盛土と認定できる層はなかった。また、地山も垂直に崖面をなす部分が認められ、掘削などによる改変を受けていると考えられる。葺石は存在しないと改めて確認できた。

地表下約 1m (標高 27.0m 付近) で地山の傾斜が水平に変化して平坦面となる場所が存在し、これが墳端と

なる可能性も考えられるが、その水平面にも不整形の掘り込みが存在することや、墳丘面全体が大きな削平を蒙っていることを考慮すると、古墳築造に伴う平坦面と言えるかどうかわからない。墳丘上に堆積する黒褐色土層は、円筒埴輪片や中世の土師皿片を含むから、墳丘削平の時期としては中世以降を考えうる。ただし、削平が太平洋戦争時のものである可能性を否定する材料はない。

出土遺物は、小片ながら、円筒埴輪が多い。従来から知られていた直立して端面をもつ口縁部とは異なって、外反して開くもの、内湾するもの、端部が尖るものなど多様な形態のものが出土した。また、突帯も低平なものばかりではなく、非常に突出度が高く、つくりが丁寧なものが伴っている。それらは既存のものよりも器壁が薄く、焼成も堅緻であり、一見古相を呈するが、いずれも外面は1次タテハケ調整のみである。スカシは円形と考えられる。底部片も数点存在するが、底部調整は見られない。焼成にも大きく2種類が認められるので、埴輪の供給体制が複数存在した可能性を考えうる。

調査期間の制約から墳丘の追究は不十分な点が残っており、円筒埴輪の多様性についてもさらなる検討のために資料的な充実が望まれる。また、削平の規模や時期についても検討する余地が大きい。次年度以降も継続する予定の調査で解決を図っていきたい。(高田)

註

- 1) 平勢隆郎氏（東京大学東洋文化研究所）のご教示による。
- 2) 防衛研究所・資料閲覧室の「戦史資料」陸軍一般資料・陸空・本土周辺110・飛行場記録（内地の一部）による。
http://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/DetailMok?id=0090092936（2020年2月6日閲覧）
- 3) 同じ濃山丘陵に位置する三浦1号墳（琵琶隈古墳）の円筒埴輪には、底部外面や底面をカットする底部調整が認められる。

参考文献

- 井殿晴子・藤本隆之・杉谷美恵子・前田均 1996『秋里遺跡』鳥取市教育福祉振興会
- 梅原末治 1922『鳥取県下における有史以前の遺跡』鳥取県史蹟勝地調査報告第1冊，鳥取県
- 梅原末治 1924『因伯二国における古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第2冊，鳥取県
- 大嶋陽一（編）2015『戦後70年 鳥取と戦争』鳥取県立博物館
- 大野哲二 2016「鳥取県東部における平安時代中期から中世前期の土師器について」『下坂本清合遺跡I』鳥取県教育委員会，pp.151-160
- 岡田裕之・八峠興 2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年—須恵器と回転台土師器を基に—」『調査研究紀要』5，鳥取県埋蔵文化財センター，pp.1-16
- 奥野中彦 1982「八・九世紀荘園と田圃制度—東大寺領因幡国高庭荘を中心に—」竹内理三編『荘園絵図研究』東京堂出版，pp.165-206
- 高田健一 2015「鳥取平野における土地環境の変化と弥生集落の形成活動」『古代文化』第67巻第1号，古代学協会，pp.35-43
- 高田健一（編）2018『直浪遺跡の研究』鳥取大学地域学部
- 田中寅夫・星見清晴・松田晃幸 1994『鳥取砂丘ものがたり』鳥取市社会教育事業団
- 田中精夫 1986『大熊段遺跡』鳥取県教育文化財団
- 藤間生大 1947『日本庄園史』近藤書店
- 鳥取県埋蔵文化財センター1986『鳥取県の古墳』鳥取県教育文化財団
- 豊島吉則・平勢隆郎・久保穰二郎・原田雅弘 1988「鳥取大学構内出土の遺物」『鳥取大学教育学部研究報告』（人文・社会科学）第40巻第2号，鳥取大学教育学部，pp.25-50
- 中原斉 1991「因幡」『前方後円墳集成』中国・四国編，pp.33-38

- 錦織勤 2010a 「布施『舟入』と因幡国守護所天神山城の構造」『地域学論集』第6巻第3号, 鳥取大学地域学部, pp.349-361
- 錦織勤 2010b 「因幡国布施・溝口の中世—湖山「瀉」の発見」『鳥取地域史研究』第12号, pp.3-17, 鳥取地域史研究会
- 西村芳将 2017 「本土決戦と『千号演習』, 勤労義勇隊, 国民義勇隊」『鳥取地域史研究』第19号, pp.61-71
- 濱田竜彦 2019 「山陰地方の縄文時代遺跡群と集落像」『縄文文化の繁栄と衰退』先史文化研究の新展開1, 雄山閣, pp.229-252
- 東方仁史(編) 2008 『因幡・伯耆の王者たち』鳥取県立博物館
- 平勢隆郎 1985 『大熊段遺跡 G 区発掘調査報告書』鳥取大学
- 平勢隆郎・豊島吉則 1986 「濃山古墳群とその環境—航空写真による鳥取大学構内古墳群の予察的研究—」『鳥取大学教育学部研究報告』(人文・社会科学)第37巻第1号, 鳥取大学教育学部, pp.81-138
- 藤田昌雄 2015 『日本本土決戦—知られざる国民義勇戦闘隊の全貌』潮書房光人新社
- 松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌』第8集, pp.1-29
- 八峠興 2016 「鳥取・湖山池周辺の中世墓群について(上)—布勢地域—」『鳥取地域史研究』第18号, pp.43-62, 鳥取地域史研究会
- 八峠興 2017 「鳥取・湖山池周辺の中世墓群について(下)—桂見・石桂見・湖山地域ほか—」『鳥取地域史研究』第19号, pp.3-24, 鳥取地域史研究会

発掘調査抄録

ふりがな	おおくまだんいちごうふん			編著者名	高田健一, 中原計			
書名	大熊段1号墳			編集機関	鳥取大学地域学部考古学研究室			
副書名	第1次調査の概要			所在地	〒680-8550 鳥取市湖山町南4丁目101番地			
				発行年月日	2020年3月27日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
おおくまだん 1号墳	とっとりし 鳥取市 こやまちょうみなみ 湖山町南4 丁目102番地	鳥取市	1-336	35°30'56"	134°10'32"	2019.8.26-9.12	20 m ²	学術調査
収録遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項			
大熊段1号墳	古墳	古墳時代後期	前方後円墳	埴輪, 土師器	鳥取市指定史跡の前方後円墳。全長45mで古墳時代後期と推測される。葺石なし。後円部墳頂に埋葬施設の一部と考えられる石材が露出する。過去に鉄鏃と鉈が出土したという伝承があるが、現存しない。墳丘各所に戦時中に掘削されたという溝があり、戦争遺跡でもあったと考えられる。			

大熊段1号墳

第1次調査の概要

発行年月日：2020年3月27日

編集・発行：鳥取大学地域学部考古学研究室

〒680-8550 鳥取市湖山町南4丁目101番地

印 刷：勝美印刷

表紙：コート紙 135kg

本文：コート紙 110kg

Excavation at the *Okumadan Tumuli*



Department of Archaeology, Faculty of Regional Sciences,
Tottori University